

2018年度(平成30年度) カラ事業報告書



ゲンドウ村市での家畜の売買

台風19号で被災した方々へ

この度の台風19号は、各地で膨大な規模の水害や土砂崩れの発生をもたらしました。被害に遭われたカラの会員の方々、またカラがお世話になっております方々のご苦勞はいくばかりかとお察しいたします。心からお見舞い申し上げます。一日も早く元通りの生活に戻られることを強く祈っております。

代表 村上 一枝

毎年、年間報告書を発行し会員並びに支援下さる方々へ報告させていただいておりますが、今回は例年よりかなり遅れてしまい、申し訳ございませんでした。会員の方々、ご支援くださる方々にお詫び申し上げます。

これまでの支援事業を振り返って

事業は住民の手に移りました。

2019年4月で平成の時代が終わりを告げ、新しい年号となりました。カラの支援事業は平成に始まり、この時代を駆け抜け、そして平成のうちに一応の成果を見ることが出来ました。このことは、村の人々に生きて行く道を拓いたと言えると思います。

皆さまのご支援で建設した多くの建物は何も語りませんが、村の人々の意識の中には多くが刻み込まれてきたと思います。

当初はいつになったら、何年経ったら村の人々の主導で活動が進み、自立できるのだろうか？もしかしたら自立は不可能ではないか？などと不安に思い、そして悩み、困難な事態にも遭遇しました。時々スタッフの失態もあり、その都度今は亡きバマコ事務局責任者のジャワラ氏と共に解決し、「鬼のようになって」カラの理念を通して事業を進めてきました。

サハラ砂漠が国土の3分の2を占めるマリ共和国は自然環境が厳しく、年間の雨量も少なく、十分な食料を収穫出来ず、年間を通して食料不足の状態です。このため人々は経済的にも苦しく、貧困はいつまでも解消されないままです。若者は出稼ぎして一族を支えているのです。

近年は、時々発生するテロリストによる襲撃や殺戮により治安の悪化が続いています。しかし現地の人々はここを故郷として生活しているため、「このような状況の下においても、安定的な収入を得て、健康で自立した生活を構築する」という問題を少しでも解消していくような支援が、我々ボランティア団体に課せられた深刻な問題でした。

では、カラはこの問題にどんな方法で取り組んでいくか？その第一と考えたのは、「まず、地元の人々との信頼関係を築く」ということ。いわゆる資金を持ってくる支援団体だからと言って「上から目線」は絶対に禁止です。そして、日本の資金による事業だからと言って、日本人の感覚での事業の進め方や人々への接し方が果たして適しているかどうか、これを見極めることが重要でした。

我々カラは、「マリの人々の心をよく知り理解すること」、そして「カラ自らが率先して行動を起こすこと」が重要と考え、村に住み込み、村人と同じ物を食べて人々の生活に密着した活動を開始しました。

実際の支援活動は何から始めるか？村内調査をして村人と相談し、必要とされていることの優先順を決めました。しかし、支援事業については、カラは「困っているからといって直ぐに与えるのではなく、何らかの代価が必要」と考えました。そしてカラの立場、村側の立場を明確にし、支援を行う条件として村側と契約をとりかわしました。村からの代価としては、事業の支援後（ハード、ソフト面に関わらず）は、すべて村の管理・運営として責任を持つこと、上手いかわなくても彼ら自身で解決するよう努力すること、約束を破った時には金額で返済してもらう、としました。



女性の集い、歌とダンスを楽しんでいます

カラは、新事業の要請があっても村の人にとって不可能な事業は承諾しませんでした。そして我々日本人側にとって「出来る事と出来ない事」をはっきり説明しました。それは「忍耐と我慢」が重要なことでした。

ボランティアの外国人が村に住むということは、現地の人に「頼めばなんでもくれる」と思われがちです。これには用心!!用心!!です。カラの支援の本質を忘れないで貫くことが非常に大切でした。

その結果、2007年頃から支援事業の多くは村の人々の手に委ねられる程の成果が見えてきました。これまで収入の無かった女性たちが収入を得、自由なお金を持つようになりました。若い女性たちが出稼ぎに行かなくても村内で資金を稼げるようになったからです。娘達の出稼ぎ者の多かったドウグラコロ村では出稼ぎ者がゼロになり、家族が非常に喜んでい

ます。各事業の管理、運営は村人が行うようになりました。コミン長は村人が自立していく姿を喜び、誇りに思い、カラに代わって人々の活動を積極的に総括するようになりました。

こうして、今までカラが行っていた活動がトゥグニコミン(行政)の手に移管されていったのです。



小学校落成式の郡長(右から 村長、スタッフのアワ、正装した郡長)

村での経験から

カラは今までに100ヶ村以上の村を支援してきましたが、人々の意識は村によって異なり、同じ事業を実施している村間でも発展の違いが生じます。その原因は男性優位の村社会で、これが開発を拒む大きな問題でした。村によっては「作業は無料では行わない、手当を出せ!!」と言うのです。

例え彼らの生活に必要な水を供給する井戸の掘削でも、態度は同じでした。「この作業をしなければ、農作業でも他の仕事でも日当を得ることが出来る」という考え方でした。そしてそういった村のボスの男性の発言にみんなが従ってしまうのです。

またある時、産院の建設にあたり「カラ東京からはセメントによる建設費用が調達されているが、しかしマリ人スタッフ達が質の落ちる土レンガを代用し、その差額をネコババしている」と言うのです。こんな時には、スタッフではなく私が村人(男性、女性参加の会議で)に説明します。「そんなに我々を信用しないなら、これ以上支援はできない、他の村に産院を建設する」と言うと、「少し待ってくれ」と村の男性たちは改めて相談し「わかった、ではカラの言うようにしよう」ということになり、解決をみます。

このような男性の行動・言動に対して女性たちは「どこの国も、マリの政府も我々の健康を考えてくれない、産院も建ててくれない。そこをカラが支援してくれるのが何故わからないのか?」と男性に対して非常に批判的でした。日常生活の苦勞を背負っている女性の意識の方が男性より高く、協力も得やすいのです。何につけても女性たちと親しく話し合い理解を深めること、これが事業を順調に進めて行けた重要なポイントでもありました。

また、どこかの村の女性達が素晴らしい成果を生み出す、それが「口」を介して周囲の村々に伝わり、大きなモディベーションになります。

事業を介しての村の開発は、女性の理解と努力により大きく左右されます。

女性たちは他の村の変わりゆく状況に刺激され、「我々の村もあのようにになりたいわ」と村を動かす原動力になります。女性は何事につけても夫の許可が必要です。しかし女性たちは、誘われなくても手仕事や衛生病気予防学習に、遠く離れた村から(村を代表して)背に赤ん坊をおんぶして早朝から何キロもテクテクと歩いて集まって来るのです。偉いナー、といつも感心し、私だったらどうしたろうか、と常に考えていました。

豊かになった状況を羨むのは人間だれでも同じこと、まして子供の早死に泣き、食料不足に苦勞している女性たちは、どんなにか辛い日々を過ごして来たのだらうと思います。同じ女性として彼女たちの状況を考えると、「早く確実に自らの手でいろいろ学び、それを生きていく技にして欲しい」と願ったのでした。

現在の事業地域のバググ村周辺の再開発事業について、この村はダウンバコムの中心村であり、カラが1993年に独立し初めて支援事業を開始した地域です。しかし村人の協力も少なく、労働は無料では行わなずに代価を求めてくるような状態でした。この地域ではマラリア予防、井戸掘り、女性の1haの野菜園や植林造成地、女性センター等など多くの支援をしました。村人の大部分は「やってもらって当然、俺らは貧乏だから」と協力せず、働くのはカラのアシスタントスタッフと数名の村人だけでした。しかし女性の野菜園だけは継続していました。我々はこれ以上をこの地域に求めることは不可能と考え、2000年にここを撤退しました。

そして、より生活環境の厳しい北方のトゥグニ地域に移動し、コニナ村とモバ村に新規に事務局を設置して支援事業を開始しました。その後のトゥグニ地域の村々の素晴らしい努力によって、自立した状況を見聞しました。そうするとバググ村から「トゥグニのように」と改めてカラに再開発の要請があり、2016年から再開発が始まりました。

現在は女性だけの活動として、適正技術の指導、識字学習の実施、資金を貯えての小規模貸付資金の開始もはじまりました。2007年に要請があり建設された小学校で学び卒業した女性が、研修を受けて村で誕生した助産師第1号になりました。その後は他の村でも村出身の助産師が誕生し、産院や診療所が計4ヶ村に開設されました。勿論働くのは全員村から選ばれて助産師になった人たちです。教育を受けることが出来ず、一生懸命に農作業を行いながら子供をたくさん産むことが女性の人生、と納得していた女性たちが、学んで助産師になったのです。これは女性にとってまさに大事件であり、強いインパクトのある出来事となったでしょう。

このように人々の反省という裏打ちがあつての再開発は、積極的で力強いものです。

今後は、真の自立へ向かっていく姿が見られると思います。



野菜園で働く女性

国内の治安の悪化が開発を遅れさせています

人々の努力によって好ましい意識が生まれてきたこの頃ですが、我々の力ではどうしようもない事も多々あります。それは、自然環境と国状の悪化です。自然環境が悪化しても村にとどまり、そこで生きて行けるようにする。これは人間の努力である程度まで克服できます。が、国の治安の悪化となると話は別です。都会でも地方でもイスラム過激派による殺戮や銀行への放火が横行し、カラの事業地の近くの街でも襲撃事件が発生しました。また、治安が悪い北方からニジェール河をさかのぼって逃げて来てた人々が村に侵入し、盗みを働くのです。

この事態は村の人々を恐怖に陥れただけでなく、我々外国人支援団体のマリ国内での足を制限し、活動地域へ行くのが禁止されました。タイミングによっては、緊急でない場合はマリ共和国へは絶対に入国しないように、と言われていました。

あの、のんびりした穏やかだったマリ共和国はどこに行ってしまったのでしょうか。



収穫を待つ綿花

今後のカラ

先述のように、終わる見込みのないマリ共和国の治安の悪化、そしてカラの事業対象地域の多くの村が自立した生活が可能になったことを鑑み、今後のカラのとりべき道を話し合った結果、今後は村の人たちの活動を傍観し、今までの事業のアフターケアに回ろう、というスタンスを取るようになりました。

マリ人スタッフも「我々だけで事業を進めていく」と決心しました。いつまでも日本人に頼ることは出来ない、との意識が働いたのです。スタッフもマリ人ですから村人同様に自立して欲しいと思います。そして今後の事業に必要な資金も彼らが獲得することになりました。マリ共和国の治安の悪化によって、在マリ日本大使館やJICAからの助成金の供与も数年前から打ち切られたままです。

しかし、カラ東京は多くの方々からのご支援をいただいています。現実問題として、マリではまだ支援が必要な村があります。建設物を作ることはまだ村民の力だけでは不可能なのです。

例えば、現在村々から多くの要請があるのは、女性向けの識字教室や女性の収入源となる適正技術を習得する教室、そして作業場ともなる女性センターの建設です。半永久的に村人に有効利用されるもので、ご寄付下さった支援者様のお名前を記念として壁面に記入します。

現在までに同様なご支援で産院が2ヶ村に、女性センターが1ヶ村に建設されました。そして2019年のトウジンヒエ、綿花、ゴマの収穫の終わる12月頃に、女性識字教室1カ村とタマネギ保存庫1カ村が建設される予定です。

このような建設をご支援いただける方は、ご遠慮なく村上宛にお電話下さい。ご支援いただいた一事業が、あなた様のお名前と共に、はるか遠いアフリカの農村の人たちの生活に活きて、日々を支える糧となります。そして将来を担う重みは計り知れません。どうぞ協力ください。

長い前書きになってしまいましたが、支援先の国の状況、事業対象地の人々とマリ人スタッフの自立がカラの今後を決めるのにいいタイミングで現れて来たと思います。

カラによるマリ共和国の農村部の人たちへの支援が終わったわけではありません、まだまだ道半ばと言えます。

1 現在、女性の識字学習に対する熱意が盛り上がっています

今になってナゼ女性が学びだしたか？ それは、村の誰もが認める優秀な女性が、村民会議で選ばれて助産師になったことが発端です。彼女は多くの女性たちの羨望の的になりました。女性の中に「将来は彼女のようにになりたい、私も勉強すれば仕事を得ることが出来て収入を得ることが出来る」という意識が生まれて来たからです。女兒の小学校への就学率も上がりました。

次いで、現在マリの隣国(西方)のギニア国境付近で金の掘削が行われており、村の多くの青年たちがそこへ出稼ぎに行ってしまったため、村に文字の書ける男性がいなくなってしまう、そのため「女性が男性の代わり」に働くことになったのです。そのため女性が識字教室へ通うようになりました。

過去には識字教室を建設し識字教師も育成しましたが、勉強するのは殆どが男性でした。学校の無い村が多く、古くから「教育を受け字を書くのは男性のすること、教育を受けると都会に出て行って村に帰ってこない」という意識が高かったのです。

しかし今は、女性の小規模貸付事業の貸付金返済時には、女性が個々の人の返済等について記録できるように、女性リーダーを育ててきました。やはり他の人より抜きん出て何かが出来るとは、口には出しませんが心の秘かな自慢でもあり自信につながります。日常生活に文字が活かされてきたため、識字教室へ通う女性は増えましたが、現状は識字教室の不足という問題にも直面しています。

今では、母親が熱心に識字教室に通って来る家庭は、子供を、特に女兒を小学校へ就学させるようになりました。



識字教室で学ぶ女性たち

2 「健康普及員・略称KMT」の活躍

この活動は相変わらず非常に積極的です。このKMTが主催するトゥグニ地域の村人への「話し合い学習会」は、既に10年以上経過しています。この学習会で学んだことは日常生活に取り入れられ、家庭内では母親から子供たちへ伝わってきました。現在はカラの手を全く煩わすことなく村人だけで進められており、最近では学んだことがしっかり実行されているか、普及員が各家庭を訪問してチェックするようになったということです。

この「健康普及員」は、現在カラが直接関わっているドウンパコミュンでは13ヶ村に組織されました。雨季の多忙な時期でも2週間ごとに学習会を開催しています。学習の内容はその月に罹患が多い疾患(5月は「はしか」が流行っていたので「はしか」)について学び、出稼ぎ者の多い時期には「性感染症・エイズ」、10月に発祥の多いマラリア、その他多くを学びます。人々の衛生観念も高くなり、村の清掃も毎週女性総出で行っています。この清掃で消耗する筈は、学習会に欠席・遅刻した女性たちからわずかな罰金を徴収し蓄えて購入の費用にしています。女性たちはその都度考えて活動を継続しています。

3 女性の自立活動支援

カラの会員のご寄付のおかげで、2018年度に待望の女性多目的センターが建設されました。この女性センターは女性適正技術の習得だけでなく識字教室としても使用されています。ここでは村の女性達が裁縫や石鹸つくりを覚え販売収入を得ています。収入は個人ひとり一人のものですが、女性委員会は共同作業で製造された物品の販売収入を女性小規模貸付事業の元金にするという大きな目的があります。この小規模貸付資金事業は現在トゥグニ地域では11ヶ村、ドウンバ地域では3ヶ村になろうとしています。貸付事業の元金はすべて村の女性達が捻出したものでカラは一切出していません、すべて村の女性達の力に依るものです。このように連帯感をもって起こす行動は、以前は無かったそうです。

トゥグニ地域では既に2001年から18年間継続し、ドウンバ地域でもバグ村が2018年4月、シラマングー村が8月から始まりました。貸付額は女性一人につき5,000cfa(日本円で約1,000円)です。これを5カ月間借り小商いを行い返済時に利息を女性委員会に支払います。現在2地域合わせて879人の女性が参加しています。販売品は手造り縫製品、家畜の飼育、調味料の販売などです。個人の収入は多くはありませんが、通常は全く収入が無いのが普通で、夫は家計費をくれませんから、自力で得て自由になる貴重な収入です。当初はカラに元金の供与を言ってきましたが「自分たちで元金を貯めたら事業を許可する」と非常に厳しく言いました。女性たちは諦めずに指導した通りに答えてくれたのです。

他の村でも女性が収入を得る手段の一つとしてこのような貸付事業を始めたいので、現在資金を貯えています。日常の収入が一定しない村では毎日少しずつ購入できる食材の販売と村には赤ん坊が多いので、赤ん坊用の衣服を町まで買いに行かなくても済む簡便さが重宝され、オバサン商売は順調です。



落成したファニネゲタブグー女性センター



ファニ ネゲタブグー女性センターで使用するバケツ、石鹸製造枠が準備されました



落成したシラブレ村産院で助産師と看護師の記念撮影

4 産院の活動

2019年2月6日に新規にシラブレ村産院がカラの会員のご寄付で開設しました。また、2018年12月末から、ドゴニ村に同様な産院の建設が始まり2019年2月に落成しました。ドゴニ村産院で働く助産師も誕生し、看護師は村で雇用しました。これまで新規開設の産院の助産師には1年間カラが給料を支払っていましたが、これを今回から辞めて村負担とするように宣言しました。その結果、助産師の給料はドゴニ村の若者グループが農作物から得た収入で担うことになりました。このように村が負担するということは過去には全く無かったことです。

尚、このドゴニ産院の開設は、村の事情もあり2019年5月頃の予定です。

2018年度(平成29年度)収支決算のご報告

2018年度((平成30年度)カラ事業費収支決算書

収入		支出	
年会費	740,000	マリ事業費	4,521,821
寄付金	2,352,787	人件費 (謝金/労務費/人件費)	688,400
助成金	283,822	旅費交通費	300,000
販売収入 ・コンサート入場券 ・物品販売金	1,099,856	事務管理費; 事務用品、通信輸送費、 賃借、印刷料、送金手 数料等を含む。	121,811
郵便貯金、銀行利息等	8	その他の経費:	15,438
計	4,476,473	計	5,647,470
2017年度から繰り越し	1,764,717	次年へ繰り越し	593,720
合 計	6,241,190	合 計	6,241,190

三菱銀行 43,345 円

郵貯銀 545,449 円

現金残 4,934 円

会計監査について
平成30年度カラ西アフリカ農村自立協力会の会計について正確かつ適正に処理されている
ことを確認いたしました。
令和 1年5月12日

監査

神小 明子
滝口 洋子

2018年(平成30年)度事業の報告

日本国内での活動

- 4/22 日本歯科大学【D Muse 2018】にて活動紹介
- 5/26 明星大学にて講義
- 10/21 熊本市講演会主催【サヘルを知る会くまもと】
「NGO活動を通して見えて来たもの マリ共和国の場合」
- 12/16 【カラコンサート 【かけはし2018】

ご注意ください:任意団体となり会の名称は「カラ西アフリカ農村自立協力会」となりました。

カラ西アフリカ農村自立協力会 <http://ongcara.org/>

東京事務局

〒177-0054

東京都練馬区立野町7-9 クリオ吉祥寺壺番館101

Tel:03-3929-5767

E-mail: centre@ongcara.org

バマコ事務局

BP E367 BAMAKO MALI

Tel:223-2020-9096